

第4回

URA シンポジウム

第6回

RA研究会

2014年

日程

9 / 17 水 13:00-17:30

18 木 9:00-18:00

場所

北海道大学 学術交流会館

(札幌市北区北8条西5丁目) 北海道大学正門から入って左手2軒目の建物

主催 (URAシンポジウム)

文部科学省「リサーチ・アドミニストレーターを育成・
確保するシステムの整備」事業採択機関 (主幹校: 北海道大学)

主催 (RA研究会)

RA協議会設立準備委員会

合同大会実行委員会

北海道大学URAステーション・RA協議会設立準備委員会・
自然科学研究機構

■オープニング～基調講演

■URA事業採択校セッション

- S-02 URA教育プログラム① : 中・上級者向け研究マネジメント人材養成プログラムの開発
東京農工大学
- S-18 URA教育プログラム② : シニアURA向け研修プログラム「大学マネジメント(仮題)」試行
金沢大学
- S-07 COI(産学連携)とURA : 大型プロジェクト(COI)におけるURAの役割とは?
九州大学・信州大学
- S-11 地域連携とURA : 地域イノベーションとURAの機能 ～ポストアワードのその先からの提言～
九州工業大学
- S-16 研究戦略とURA : 研究戦略推進支援におけるURAの役割
大阪大学・筑波大学

■URAシンポジウムセッション

- S-03 国際的な研究ネットワーク構築に必要な支援とは ～URA主導の事例紹介も交えて～
エルゼビア・ジャパン株式会社
- S-17 研究戦略立案・評価のための研究力分析の総まとめ ～新しいInCitesを使った分析手法から事例まで～
トムソン・ロイター
- S-12 英国URA視察訪問の成果報告～日英URAネットワーク構築に向け、視察訪問からの学び、発見と今後のアクション～
ブリティッシュ カウンシル
- S-09 URAの将来と産業サイドの役割ーURAサポートフォーラム(仮称)の設立に向けて
URAサポートフォーラム(仮称)
- S-20 URA制度導入による産学官連携の新たな展開
産学連携学会
- S-05 既存職からみたURAとの協働のあり方
日本知財学会 産学連携・イノベーション分科会

■大学研究力強化ネットワークセッション 世界に影響を与える大学・研究機関の未来

- S-01 大学の競争力強化のための利益相反マネジメント - 個人レベルから組織レベルまで
小泉 周 (自然科学研究機構)
- S-08 大学ランキングと研究大学の評価指標を考える
小泉 周(自然科学研究機構/JST科学コミュニケーションセンター)
白根 純人(JST科学コミュニケーションセンター)

S-14 研究戦略としての国際情報発信 ～効果的な国際情報発信戦術のあり方を共に考える～

小泉 周(自然科学研究機構)
佐藤 法仁(岡山大学)

S-19 研究力強化のための国際連携のあり方、進め方

小泉 周(自然科学研究機構研究力強化推進本部特任教授)

■RA研究会セッション

S-04 人社系分野への研究支援と研究評価 ～グッドプラクティスを探る～

森本 行人(筑波大学)
稲石 奈津子(京都大学)

S-06 Horizon 2020への参加他を通じた日欧連携促進に向けての国内情報ネットワーク構築の提案と意見交換

市岡 利康(日欧産業協力センター)
松本 宏(日欧産業協力センター)

S-10 URAと海外広報 世界は広いよ～研究成果を海外のメディアへ!

今羽右左 デイヴィッド 甫(京都大学 KURA(学術研究支援室))
岩崎 琢哉(大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室)

S-13 「研究支援学」は可能か

澤田 芳郎(小樽商科大学)
馬場 大輔(岐阜大学)

S-15 私大の研究力強化への新たな取組～国公立との違い、私大だからできるユニークな取組～

角谷 賢二(関西大学)
田中 好雄(東海大学)

■ランチピクニック～URAシンポジウム全体討論～クロージング

■RA協議会セッション

■URA事業採択校ポスターセッション

U-01 京都大学におけるURAシステムの現状 2014

京都大学

U-02 信州大学 リサーチ・アドミニストレーションセンター

信州大学

U-03 URA整備事業 4年目の活動について

東京農工大学

U-04 新潟大学におけるリサーチ・アドミニストレーションシステムの整備

新潟大学

U-05 九州工業大学におけるURA事業の取り組み

九州工業大学

U-06 医学研究の支援・推進のための実務に特化したURA体制の実現とキャリアパス

東京女子医科大学

U-07 東京大学のURA育成に向けた取り組み

東京大学

U-08 「世界的研究拠点」のためのリサーチ・アドミニストレーションシステムの整備

大阪大学

U-09 新体制でより強固な研究支援の実現へ

名古屋大学

U-10 福井大学URAの特色と研究支援活動

福井大学

U-11 金沢大学URA組織の現状と未来

金沢大学

U-12 研究力IRとしての、研究力指標と財務指標との関係についての分析と考察-中規模国立大学群を中心とした考察-

山口大学

U-13 大学を支えるプロ集団を目指して

九州大学

U-14 筑波大学URA組織の定着に向けた活動について

筑波大学

U-15 北海道大学 URAステーションの取り組み – 約2年を振り返って

北海道大学

■合同大会ポスターセッション

2014/9/17 (水)

	大講堂 2~3F	小講堂 1F	第1会議室 1F	第2会議室 1F	第3会議室 1F	第4会議室 1F					
11 30 45	開場・受付										
12 00 15 30 45											
13 00 05 10	オープニング										
15 20 25	基調講演										
30 35 40 45 50 55	文部科学省										
14 00 05 10	休憩										
15 20 25 30 35 40 45 50 55											
15 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55	S-01 大学研究力強化NW セッション: 大学の競争力強化 のための利益相反 マネジメント	S-02 URA事業採択校 セッション: 教育プログラム① 東京農工大学	S-03 URAシンポジウム セッション: 国際的な研究ネット ワーク構築に 必要な支援とは エルゼビア・ ジャパン株式会社	S-04 RA研究会 セッション: 人社系分野への 研究支援と 研究評価 ～グッド プラクティス を探る～	S-05 URAシンポジウム セッション: 既存職からみた URAとの 協働のあり方 日本知財学会	S-06 RA研究会 セッション: Horizon 2020への 参加他を通じた 日欧連携促進に 向けての国内情報 ネットワーク構築の 提案と意見交換					
16 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55	S-01 大学研究力強化NW セッション: 大学の競争力強化 のための利益相反 マネジメント	S-07 URA事業採択校 セッション: COIとURA 九州大学・信州大学	休憩		S-08 大学研究力強化NW セッション: 大学ランキングと 研究大学の 評価指標を考える	S-09 URAシンポジウム セッション: URAの将来と 産業サイドの役割 URAサポート フォーラム(仮称)	S-10 RA研究会 セッション: URAと海外広報 世界は広いよ～ 研究成果を 海外のメディアへ!				
17 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55											
18 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55	懇親会 キリンビール園 本館										
19 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55											
20 00											

2014/9/18 (木)

	大講堂 2～3F	小講堂 1F	第1会議室 1F	第2会議室 1F	第3会議室 1F	第4会議室 1F
9 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55	ポスターセッション					
10 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55	休憩					
11 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55		S-11 URA事業採択校 セッション: 地域連携とURA 九州工業大学	S-12 URAシンポジウム セッション: 英国URA視察訪問 の成果報告 ブリティッシュ カウンシル	S-13 RA研究会 セッション: 「研究支援学」 は可能か	S-14 大学研究力強化NW セッション: 研究戦略としての 国際情報発信	S-15 RA研究会 セッション: 私大の研究力強化 への新たな取組 ～国公立との違い、 私大だからできるユ ニークな取組～
12 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55	ランチピクニック					
13 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55		S-16 URA事業採択校 セッション: 研究戦略とURA 大阪大学・筑波大学	S-17 URAシンポジウム セッション: 研究力分析の 総まとめ・基礎から 応用まで トムソン・ロイター	S-18 URA事業採択校 セッション: 教育プログラム② 金沢大学	S-19 大学研究力強化NW セッション: 研究力強化の ための 国際連携の あり方、進め方	S-20 URAシンポジウム セッション: URA制度導入に よる産学官連携の 新たな展開 産学連携学会
14 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55	休憩					
15 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55	URAシンポジウム 全体討論					
16 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55	URAシンポジウム クロージング					
17 00 05 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55	RA協議会 セッション					

9/17 大講堂 2～3F 13:00～14:00

オープニング～基調講演

■オープニング

北海道大学 総長 山口 佳三

■基調講演

文部科学省 科学技術・学術政策局 局長 川上 伸昭



プログラム
～オーラルセッション～

大学研究力強化ネットワークセッション

大学の競争力強化のための利益相反マネジメント - 個人レベルから組織レベルまで

セッションオーガナイザー 小泉 周 (自然科学研究機構)

■モデレーター・総合進行 渡部 俊也 (東京大学)

■登壇者 Ara Tahmassian (ハーバード大学 the University Chief Research Compliance Officer、PhD)

■パネリスト 棚橋 元 (森・濱田松本法律事務所弁護士)
西尾 好司 (富士通総研主任研究員)
江戸川 泰路 (新日本有限責任監査法人パートナー・公認会計士)

■協力: 東京大学 政策ビジョン研究センター (組織としての利益相反研究会)

■司会と解説 小野 奈穂子 (米国弁護士(ニューヨーク)日本法学博士、東京大学政策ビジョン研究センター客員研究員)

国立大学が法人化した2004年頃を境に、大学教員の産学連携活動が教育・研究の利害と対立する場合の管理方法として、米国大学などで実施されてきた利益相反マネジメントが大学として検討されるようになった。日本でも医学系分野などを中心に、多くの大学で、教員の利益相反マネジメントの実践が試みられてきた。加えて最近では、大学法人自身が研究成果の事業化のための出資が可能になるなどの背景から、従来の教員個人レベルの利益相反マネジメントに加えて、組織レベルでの利益相反マネジメントも必要になってきている。

本セッションではこのような背景から、関心が高まっている利益相反マネジメントについて「個人レベル」から「組織レベル」までの射程で、どのような実践がもとめられるのかについて、利益相反マネジメントの長い経験を有する米国大学のゲストの基調講演、および有識者のパネル討論を行う。(本セッションは東京大学政策ビジョン研究センター、大学と社会研究ユニットの協力で開催いたします)

URA事業採択校セッション：URA教育プログラム①

中・上級者向け研究マネジメント人材養成プログラムの開発

セッションオーガナイザー 伊藤 伸 (東京農工大)

■登壇者 池田 雅夫 (大阪大学 大型教育研究プロジェクト支援室/ 副学長)
高橋 真木子 (金沢工業大学 工学研究科知的創造システム専攻)

■司会者 伊藤 伸 (東京農工大学大学院 工学府産業技術専攻)

東京農工大学先端産学連携研究推進センターが、学内の工学府産業技術専攻(専門職大学院)と協力して進めている「中・上級者向け研究マネジメント人材養成プログラムの開発」を紹介するとともに国内の大学等において必要となる中・上級者の研究マネジメントスキルについて会場を交えて議論する。リサーチ・アドミニストレーターの「スキル標準」を踏まえた研修科目の設定に加え、組織マネジメントやOJT(On the Job Training)、組織評価手法等の組織を牽引するスキルの重要性についても検討を深める。中・上級者を目指す人材にとっても有益な情報交換の機会としたい。

URAシンポジウムセッション

国際的な研究ネットワーク構築に必要な支援とは ～URA主導の事例紹介も交えて～

セッションオーガナイザー 恒吉 有紀 (エルゼビア・ジャパン株式会社)

清水 毅志・柿田 佳子 (エルゼビア・ジャパン株式会社)

■講演者 Anders Karlsson (Elsevier グローバル・アカデミック・リレーションズ 副社長)
(英語による講演を予定しています。通訳はございません。ご了承ください。日本語の補助資料を提供予定です。)

清家 弘史 (東北大学 研究推進本部 ユニバーシティ・リサーチ・アドミニストレーター 特任准教授)

宇根山 絵美 (岡山大学 学長特命(研究担当) リサーチ・アドミニストレーター)

恒吉 有紀 (エルゼビア・ジャパン株式会社 ソリューション・マネージャー)

■司会者 清水 毅志 (エルゼビア・ジャパン株式会社 ソリューション・マネージャー)

世界に通用する強みをもつ大学となる。そのための手段として、国際パートナー選びは必ず検討することのひとつです。最適な国際パートナーは、人的流動を促進し、高インパクトが期待できる研究活動を推進します。本セッションでは、先進的に大学主導で戦略的な国際研究ネットワーク構築の活動をされていらっしゃる大学の事例とともに、国際共著論文の動向の変化からみられる世界での国際連携のトレンドや、ネットワーク構築を支援する活動・ツールをご紹介します。

RA研究会セッション

人社系分野への研究支援と研究評価 ～グッドプラクティスを探る～

セッションオーガナイザー 森本 行人 (筑波大学)
稲石 奈津子 (京都大学)

■登壇者 稲石 奈津子 (京都大学 本部構内(文系)URA室) 「学内URAネットワークを活用した人文社会系支援」

川人 よし恵 (大阪大学 大型教育研究プロジェクト支援室) 「人社系研究支援ならではのプロセスを考える」

白井 哲哉 (京都大学 学術研究支援室) 「英国の研究評価体制からの考察」

■司会者 森本 行人 (筑波大学 URA研究支援室) 「人文社会学系の研究力把握に向けた試み」

日本国内だけでなく、海外でも人社系分野における研究支援が注目されています。しかし、組織的な人社系支援が成功している大学・機関は少なく、手探りで進めているところがほとんどです。このような状況を改善するため、人社系分野の研究支援の取り組みについて、いくつかの先進的なチャレンジをボトムアップ型支援・トップダウン型支援に分けて紹介します。また、後半はパネルセッションとして、フロアとのディスカッションを通じ、人社系分野への研究支援と研究評価のグッドプラクティスを探っていきたいと考えています。

URAシンポジウムセッション

既存職からみたURAとの協働のあり方

セッションオーガナイザー 原田 隆 (日本知財学会 産学連携・イノベーション分科会)

- 登壇者
- 山本 貴史 (東京大学TLO)
 - 内島 典子 (北見工業大学 社会連携推進センター) 「大学の産学官連携コーディネータからみたURAとの協働」
 - 坂井 貴行 (徳島大学 産学官連携推進部)
 - 久保 浩三 (奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究推進センター) 「既存職からURAに期待すること」
- 司会者
- 原田 隆 (日本知財学会 産学連携・イノベーション分科会)

大学の研究力強化を目的に多くの大学でURAの配置が進んでいる。URAは職位としては新しくできた「第3の職種」である一方、研究支援というサービスは、従来から研究推進部などの事務系部署(に所属する一般職)や産学連携本部などの産学連携コーディネータにより行われてきた。URAが期待される役割を達成するためには、これら部署との「協働」により仕事をしていくことが不可欠である。本セッションは、研究を社会還元までもっていく研究プロデュースがURAの主目的であると仮定し、関連部署と協働による出口指向の研究支援のあり方およびそこにおけるURAへの期待と課題についてディスカッションしたい。

RA研究会セッション

Horizon 2020への参加他を通じた日欧連携促進に向けての国内情報ネットワーク構築の提案と意見交換

セッションオーガナイザー 市岡 利康 (日欧産業協力センター)

松本 宏 (日欧産業協力センター)

■登壇者 市岡 利康 (日欧産業協力センター) 「Horizon 2020の概要」
松本 宏 (日欧産業協力センター) 「Horizon 2020ネットワークの提案」

■司会者 市岡 利康 (日欧産業協力センター) 「URAからHorizon 2020ネットワークへの要望、意見交換」

Horizon 2020はEUの幅広い包括的な研究・イノベーションプログラムですが、世界中からの参加が可能です。日本からの参加の場合、個人向けのプログラムは日本人も助成対象であり、機関参加のものに関しては、自動的な助成対象とはならないものの、欧州との広範なネットワークの形成と高いインパクトを持つ共同研究開発が可能となります。プログラムに関する日本のコンタクトポイント(NCP)として日欧産業協力センターが任命され、最新の公募情報の提供等各種支援を計画しています。その一環として国内主要大学、研究機関ともネットワークを形成したく、URAとの連携可能性の提案、ご要望に関する意見交換の場を企画いたします。

URA事業採択校セッション：COI(産業連携)とURA

大型プロジェクト(COI)におけるURAの役割とは？

セッションオーガナイザー 三和 正人 (九州大学)
村上 昭義 (信州大学)

■登壇者 三和 正人 (九州大学 URA)
佐々木 ひろみ (九州大学 URA)
杉原 伸宏 (信州大学 URA)
村上 昭義 (信州大学 URA)

■司会者 平田 徳宏 (九州大学 URA)

大規模産学官連携プロジェクトである「文部科学省・JST 革新的イノベーション創出プログラム(COI STREAM)」が平成25年度から開始されている。本セッションでは、COIプロジェクトにおけるテーマ設定、研究者チーム構築、申請書作成、ポストアワード等の一連の流れの中で、URAがどのような役割を果たしたかを大学規模やURA組織体系の異なる大学別に、実務者がそれぞれの立場から事例報告を行う。大学におけるURAのあり方や必要なスキル等に関して全体で議論を行い、大型プロジェクトにおけるURAの支援状況や今後のあり方、課題を抽出する。

大学研究力強化ネットワークセッション

大学ランキングと研究大学の評価指標を考える

セッションオーガナイザー 小泉 周 (自然科学研究機構/JST科学コミュニケーションセンター)
白根 純人 (JST科学コミュニケーションセンター)

■登壇者 調 麻佐志 (東京工業大学 准教授)
宮入 暢子 (Nature)
山本 進一 (岡山大学 副学長・理事/大学評価・学位授与機構)

■パネリスト 田中 弥生 (大学評価・学位授与機構 教授)
永山 國昭 (総合研究大学院大学 理事)

■司会者 小泉 周 (自然科学研究機構/JST科学コミュニケーションセンター)

研究大学や研究機関の評価指標として、タイムズ・ハイアー・エデュケーション発表の大学ランキングなど様々な評価指標がしられている。評価指標ごとに特徴があり、使われ方も異なるが、研究大学の国際的な競争力と国際的な知名度等が重要であることは間違いない。こうした指標のあり方について、日本有数のメトリクス専門家に講演していただく。また、Natureがあらたに発表したNature Indexについて紹介していただき、こうした大学ランキングのそれぞれの特徴とその活用方法について議論する。URAにとって研究大学の評価指標としての大学ランキングについて考える機会とし、国際展開などあらたな事業に結びつけていただく。

URAシンポジウムセッション

URAの将来と産業サイドの役割—URAサポートフォーラム(仮称)の設立に向けて

セッションオーガナイザー 岡本 真 (アカデミック・リソース・ガイド株式会社)

藤田 方江 (アカデミック・リソース・ガイド株式会社)

■登壇者 岡本 真 (アカデミック・リソース・ガイド株式会社)

杉山 岳文 (株式会社ジー・サーチ)

櫻井 一貴 (株式会社リクルートテクノロジーズ)

現在、産業サイドにおいても、URAの将来に対する関心が高まっている。特に、せっかく生み出されたURAであるが、特に来年度以降は予算面も含めて厳しい状況になることが予測される。そこで本セッションでは、産業サイドで現在設立を検討しているURAサポートフォーラム(仮称)の構想を語り、URAを日本に根付かせるうえでの産業サイドの役割を考えたい。本フォーラムでは、会場とのインタラクティブなやりとりを重視し、URAの方々からのご要望を細大漏らさずうかがいしつつ、今後の展開へとつなげる予定である。

RA研究会セッション

URAと海外広報 世界は広いよ ～研究成果を海外のメディアへ!

セッションオーガナイザー 今羽右左 デイヴィッド 甫 (京都大学 KURA (学術研究支援室))
岩崎 琢哉 (大阪大学 大型教育研究プロジェクト支援室)

■登壇者 今羽右左 デイヴィッド 甫 (京都大学 KURA (学術研究支援室))

■司会者 岩崎 琢哉 (大阪大学 大型教育研究プロジェクト支援室)

本セッションでは、研究大学強化事業で特にニーズが高いと思われる海外広報にフォーカスする。「海外でもニュースになって欲しい案件がある。何からどうやって始めるか?」を起点に、自らの考えでこの課題にアプローチできる手がかりを、個々の参加者の手元に残せるようなセッションを目指す。この分野における実務経験をふまえ、何をどう書いてどこに送るかといった初歩から、配信サービスの選択やライティングの戦略などを取り扱う。前半にレクチャーを、後半を質疑応答とする。参加者と講師を双方向に結びながら、実践から離れることなく海外メディアへのアプローチを俯瞰する。

URA事業採択校セッション: 地域連携とURA

地域イノベーションとURAの機能 ~ポストアワードのその先からの提言~

セッションオーガナイザー 小川 由紀子 (九州工業大学)

倉田 奈津子 (九州工業大学)

■基調講演 宮本 岩男 (経済産業省) 「経済産業省における産学連携施策について」

■コメンテーター 宮本 岩男 (経済産業省)

■パネリスト 荒磯 恒久 (北海道大学)

川野 克己 (株式会社 エスアールエル)

長廣 裕 (公益財団法人北九州産業学術推進機構)

■司会者 小川 由紀子 (九州工業大学)

URA事業(※1)も最終年度を迎え、今後は専門性の高い職種としての定着化が図られている。本セッションのテーマである地域連携は、URA制度が存在する前からある大学の社会貢献の一面だが、今後は大学の中長期戦略に従って、大学と企業の共同による一次元の技術のやり取りから、大学とファンディング・エージェンシー(行政機関・金融機関)、地域企業との二次元・三次元の連携による相乗効果を生み出すことが期待される。そこで今回は、科学技術による地域活性に焦点をあて、基調講演と地域産業に関わる「産」・「学」・「官」のパネリストによる公開討論を通じて、ポストアワードの先にある地域イノベーション創出からバックキャストして、URAに求められる機能について考える契機とする。

※1 科学技術人材養成等委託事業「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備

URAシンポジウムセッション

英国URA視察訪問の成果報告

～日英URAネットワーク構築に向け、視察訪問からの学び、発見と今後のアクション～

セッションオーガナイザー 齊藤 雄二（ブリティッシュカウンシル）

- 登壇者
- ディビッド・ラングリー（ブリストル大学、研究、事業開発局長）
 - ローナー・コフーン（ブリストル大学・研究開発部・次長）
 - 武藤 誠太郎（京都大学、学術研究支援室、副室長）
 - 田中 梓（ブリティッシュ・カウンシル、教育推進・連携部長）

世界・国・地域という、さまざまな単位で社会的課題が複雑化し、多様化する現在、日英の大学セクターは、研究をイノベーションの創出へと導いて、社会的・経済的な貢献をすることが求められています。この状況下において、異なる学問領域やセクター、国を横断してつなぎ、大学の研究から社会イノベーションの創出をリードするURAの役割は日英両国において極めて重要です。

このセッションでは、日英URAネットワーク構築に向け実施されたURA英国視察訪問の成果を、京都大学、学術研究支援室副室長の武藤 誠太郎氏に共有していただくとともに、英国ブリストル大学、研究、事業開発局長のディビッド・ラングリー氏より、英国におけるURAの最新の動向についてお話しします。

またセッション後半では、日英がこの分野で協働する意義や、日英URAネットワークを構築することを通して、具体的に何が成し遂げられ、どのように日英両国の大学セクターの発展につながるのか、など議論します。

RA研究会セッション

「研究支援学」は可能か

セッションオーガナイザー 澤田 芳郎 (小樽商科大学)
馬場 大輔 (岐阜大学)

■登壇者 原田 隆 (東京工業大学) 「URAの責任と職業倫理」
山田 光利 (Smips・研究現場の知財分科会) 「研究機能が分散する社会を想う」

■司会者 澤田 芳郎 (小樽商科大学) 「産学連携の分化とコーディネータ」
馬場 大輔 (岐阜大学) 「研究マネジメントについて」

およそ現象が存在するところ、それは研究の対象になる。我々URAが従事する研究支援も例外ではないが、それが「学」を名乗るには意見交換しようとする複数の人間が必要であり、おそらくは職務の一部としても認められなければならない。すると問われるのは学としての存在意義である。本セッションでは趣旨説明に続き、各パネリストから各自のテーマに関するプレゼンを得たうえ、研究支援学の領域やアプローチを検討してこの問題を考える。研究支援学がURAの認識や行動をどう支えるかも深めたい。

大学研究力強化ネットワークセッション

研究戦略としての国際情報発信 ～効果的な国際情報発信戦術のあり方を共に考える～

セッションオーガナイザー 小泉 周（自然科学研究機構）

佐藤 法仁（岡山大学）

■登壇者 岡田 小枝子（高エネルギー加速器研究機構）

森田 洋平（沖縄科学技術大学院大学）

Adarsh SANDHU（豊橋技術科学大学）

■司会者 佐藤 法仁（岡山大学）

研究は、「調査・実験をして、学会発表、論文にして終わり」ではありません。最終的な目的は社会実装であり、その社会実装には、国際的プレゼンスを高め、「有効な協働先に研究シーズ情報を届ける」国際情報発信が必要となります。

本セッションでは、研究戦略の一部に国際情報発信があるという点を再確認し、より効果的な情報発信を行う戦術について、参加者らと共に対話を通じて考えます。

登壇者からは、効果的な事例紹介、その効果測定法、そして目指すべき国際情報発信戦術の提案を行って頂き、最後に参加者らと共にグループディスカッションを設け、効果的な国際情報発信戦術を考えます。

国際情報発信のパイオニアおよびエキスパートである登壇者と参加者らに対話を深め、そこから得られたアイデアの芽と戦術が世界に影響あたえる大学・研究機関へと巣立つ布石となればと思います。

RA研究会セッション

私大の研究力強化への新たな取組 ～国公立との違い、私大だからできるユニークな取組～

セッションオーガナイザー 角谷 賢二 (関西大学)

田中 好雄 (東海大学)

■プレゼンター

名久井 恒司 (東京理科大学 研究戦略・産学連携センター研究・産学連携支援部門長)
「理科大ならではの研究推進のためのURAセンター機能強化」

中谷 吉彦 (立命館大学 産学官連携戦略本部 副本部長・教授)
「研究の高度化に向けたテクノ プロデューサ制度」

松永 康 (早稲田大学 研究戦略センター教授)
「早稲田大学の研究力強化の取組」

角谷 賢二 (関西大学 学長室シニアURA)
「関大におけるイノベーション創出に向けたURAの取組」

田中 好雄 (東海大学 研究推進部 研究計画課長)
「東海大における研究推進支援体制の変遷
—大学経営を支えるURA人材の仕事観と教職協働の実践—」

石田 貴美子 (同志社大学 研究開発推進機構 URAセンター学術研究員(URA))
「同志社大学の研究支援体制とURAの役割」

■ファシリテータ

丸山 浩平 (早稲田大学 研究戦略センター准教授)

■司会者

石田 貴美子 (同志社大学 研究開発推進機構URAセンター学術研究員(URA))

日本の大学の77%、大学生の73%を擁する私立大学は、日本の高等教育の不可欠な存在です。また、大学の使命の一つである「研究」の活性化を推し進め、イノベーションの芽を育む研究力を強化することが強く求められており、そのためには研究者がより研究活動に専念できる研究推進支援体制を整備することが重要です。このセッションでは幾つかの私立大学における独自の研究推進体制、URA組織、その活動などを紹介し、有識者からの俯瞰的なコメントも頂きながら私立大学の研究力強化への期待、ユニークな取組等について議論します。このセッションが多くの機関にとっての研究推進支援体制の構築、個々のURAの資質の向上の一助になれば幸いです。

URA事業採択校セッション: 研究戦略とURA

研究戦略推進支援におけるURAの役割

セッションオーガナイザー 池田 雅夫 (大阪大学)、二階堂 知己 (筑波大学)
宮田 知幸 (大阪大学)、岡林 浩嗣 (筑波大学)

■講演者 稲垣 美幸 (金沢大学 先端科学・イノベーション推進機構 助教)
馬場 忠 (筑波大学 生命環境系 教授/研究戦略室長)
田中 耕司 (京都大学 学術研究支援室 室長)
池田 雅夫 (大阪大学 特任教授・副学長(URA担当))

■司会者 二階堂 知己 (筑波大学 URA研究支援室 主幹URA)
宮田 知幸 (大阪大学 大型教育研究プロジェクト支援室 特任教授)

URAは各大学の研究力を向上させるため、多様な取組を進めています。その一つとして、文部科学省の委託事業で東京大学がまとめられたスキル標準でURAの中核業務の一つとされている研究戦略推進支援業務があります。URAは各種情報を収集し、各大学の研究力の強みや課題を分析するなど、様々な研究戦略推進支援の取組を進めています。

このセッションでは、各大学での研究戦略の策定、周知および戦略に基づいた活動など様々な局面におけるURAによる支援の取組事例をいくつか報告するとともに、それらの報告を踏まえて、研究戦略推進支援においてURAはどのような役割を演ずるのか、URAはどのような方向性でスキルアップを図っていくべきなのか、などについて議論を行います。

URAシンポジウムセッション

研究戦略立案・評価のための研究力分析の総まとめ ～新しいInCitesを使った分析手法から事例まで～

セッションオーガナイザー 古林 奈保子 (トムソン・ロイター)

鳴島 弘樹 (トムソン・ロイター)

■登壇者 松下 豊 (トムソン・ロイター)
鳴島 弘樹 (トムソン・ロイター)
広瀬 容子 (トムソン・ロイター)
Jon Stroll (トムソン・ロイター)

■司会者 甲斐 真佐美 (トムソン・ロイター)

URAの重要な役割に研究戦略のためのデータ収集、プロジェクト申請のための分析やプロジェクトの評価、各種公募資料の作成等があります。その中で論文データを中心とする研究力の分析はますます出番が増えてきました。しかしこれらのデータには「癖」があり、扱う際には注意が必要です。また分析してみてその大変さを痛感している方も多いかと思います。実際にURAが研究戦略の立案やレビューを行う場面を想定し、2014年に新たに提供を開始するInCites Benchmarking & Analyticsを使い、研究分析のステップからよく使われる指標や新しい指標等、重要なポイントをまとめて紹介します。

URA事業採択校セッション : URA教育プログラム②

シニアURA向け研修プログラム「大学マネジメント(仮題)」試行

セッションオーガナイザー 鳥谷 真佐子 (金沢大学 先端科学・イノベーション推進機構)
米田 洋恵 (金沢大学 先端科学・イノベーション推進機構)

■登壇者 Iris Wiczorek (IRIS科学・技術経営研究所)

■司会者 鳥谷 真佐子 (金沢大学 先端科学・イノベーション推進機構)

金沢大学は平成26年度の文部科学省補助事業において「中・上級者向け研究マネジメント人材養成プログラムの開発」に着手した。東京農工大学と連携して開発を進めている研修プログラムのうち、大学マネジメントに関する科目を試行する。

開発中の科目は研究マネジメント経験等を10～15年程度有する人材を主対象に想定しているが、本セッションへの参加資格は問わない。セッションは具体的な事例を題材として議論を進める、少人数(30名程度)参加型のケーススタディ方式で実施する。セッション終了後にはアンケート調査を行い、参加者からのフィードバックを研修プログラムに反映することを予定している。

大学研究力強化ネットワークセッション

研究力強化のための国際連携のあり方、進め方

セッションオーガナイザー 小泉 周 (自然科学研究機構研究力強化推進本部 特任教授)

■登壇者

檜山 隆 (熊本大学 教授)

三宅 雅人 (奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究推進センター 国際共同研究室 特任准教授)

白木 邦明 (名古屋工業大学 リサーチ・アドミニストレーション・オフィス長)

小泉 周 (自然科学研究機構 研究力強化推進本部特任教授)

我が国の大学等の国際共同研究の一層の促進を通じて、我が国の研究力強化を図るため、3大学(熊本大学、奈良先端科学技術大学院大学、名古屋工業大学) +自然科学研究機構より、国際共同研究を目的とした国際連携の事例紹介を通じて、国際共同研究を推進する上で問題となった案件やそれらの案件を解決するためにURA(研究支援人材、研究支援体制)は如何にあるべきか問題提起を行う。

その上でセッション参加者からも意見を伺い、国際共同研究を推進する上でURAはどのような役割を果たすべきか、またそれらの人材を育成するにはどのようにすべきかなどを明らかにする。

(議論のポイント)

- ・理想と現実のギャップ、課題と(成功)事例の紹介
- ・上記のギャップを埋めるためにはどうすべきか。また、既知の研究者同士によるpoint-to-pointの国際共同研究だけでなく、双方にとって発展性のある新しい共同研究の芽をいかに広げ開拓していけるか。そのために、必要なサポート体制・支援人材はどうあるべきか。
- ・そのためのURAにはどのような資質が必要か、育成はどうすべきか。

URAシンポジウムセッション

URA制度導入による産学官連携の新たな展開

セッションオーガナイザー 伊藤 正実 (群馬大学)
桑江 良昇 (宇都宮大学)

■パネラー

柿田 佳子 (エルゼビア・ジャパン株式会社)
石塚 悟史 (高知大学)
杉原 伸宏 (信州大学) 「研究と産学官連携の高次元での融合を目指すURA活動」
原田 隆 (東京工業大学)

■司会者

伊藤 正実 (群馬大学)

日本の既存の産業が成熟しつつある中、産業構造の変換が求められている状況であり、これへの対処に向けて大学の研究力を強化し、本質的なイノベーションにつなげようという流れから、URAが大学に導入されたと捉えることが出来る。即ち、これにより大学における産学官連携の範囲は大きく変わっていくことが予想される。一方、産学官連携においては、リニアモデルではなくインタラクティブな関係を構築しなければ、イノベーションの創出につながる可能性は決して高くない事は過去の経験が実証している。URA制度の大学への導入は日本における産学官連携の質の変容を意味することなのか、課題等も含めて将来の展望について議論したい。

ランチピクニック～URAシンポジウム全体討論～クロージング

ランチピクニック～URA シンポジウム全体討論～クロージング

ランチピクニックからURAシンポジウム全体討論、クロージングまでは一連の繋がりのあるプログラムとなっております。本シンポジウムでは、URAの一人一人に深くURA制度の持続的発展について考えてもらうことを目的として、かつてないほどの大規模な参加型のセッションを企画しました。そのため、ランチピクニックの時間もプログラムの一部として有効に活用したいと考えております。また全体討論を実質的な議論の場とするため、会場の収容人数の関係から人数を制限させていただきます。

9月18日		
11:45	ランチピクニック	学術交流会館入り口付近で、参加登録をされた方に、サンドイッチと飲物をお渡しします（無料）。受け取った方から、6人1組になり、中央ローンに移動し、自己紹介、名刺交換などをしながら楽しく昼食をとっていただきます。（1組に1枚レジャーシートをお渡しします）
14:30	URA シンポジウム 全体討論	「持続可能なコラボレーションのためのワークショップ」冒頭は大講堂にお集まりいただきます。15分程度情報提供を行った後、ランチピクニックの時に作っていただいた班に分かれて、学術交流会館の部屋をめぐっていただき、少人数グループでの密度の濃い議論を行っていただきます。途中、休憩やグループの組み替え等を適宜行うかもしれませんが、なにぶん狭い施設をご利用いただくため、皆様の速やかな移動などのご協力が不可欠です。北大 URA ステーションスタッフが、誘導をいたしますので、どうぞ積極的なご参加をお願いいたします。
16:00	クロージング	再び、大講堂に集合していただきます。クロージングは参加登録制にいたしませんので、大講堂に入りきれない参加者の方は、小講堂で中継をご覧ください。全体討論の中で出た、ベストなコラボレーションについて、いくつかご紹介し、シェアいたします。（シェアしきれない部分については、後日メールマガジン等で参加者での共有を考えております）
		第4回URAシンポジウム・第6回RA研究会 合同大会 事務局長 北海道大学 URAステーション 江端 新吾 実行委員長 北海道大学 理事・副学長 川端 和重

RA協議会セッション

RA 協議会 (Research Administrator Network (英語名)) の設立について

セッションオーガナイザー 高橋 真木子 (金沢工業大学)

RA ネットワーク協議会準備委員会は、URA 実務者の相互研さん、情報交換を推進する全国的ネットワークの構築をめざし、2013年11月19日のURA 事業シンポジウム・RA 研究会合同大会を契機に、14年3月10日準備委員会の発足を経て、2014年度内の発足にむけ設立準備を行ってきた。これまでの検討結果、今後の活動概要案を本シンポジウム・研究会に御参画の皆様を紹介し、広く賛同・参画を得る場としたい。



Transforming intelligent research
into research intelligence

Elsevier Research Intelligence

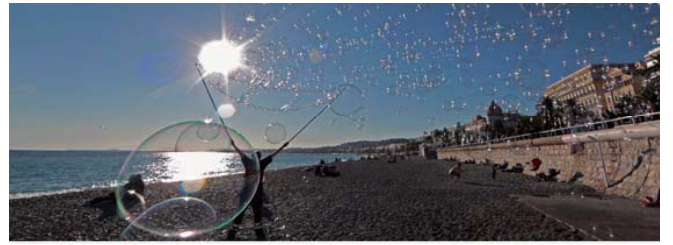
エルゼビアの研究マネジメント支援サービス

研究戦略立案に必要不可欠な、書誌情報分析を容易にするツールとサービスをご提供します。研究者個人、部局、大学単位、国単位での研究業績の把握、分析、比較などが可能です。エルゼビアはアクションにつながる分析・ツールの利用をサポートします。

<http://www.elsevier.com/jp/eri>



THOMSON REUTERS 研究分析ソリューション



多くの大学・研究機関にて各種研究分析ソリューションをご利用頂いております
下記のサービスの多くが日本のURAのみなさまのご要望を元に
日本オフィスで開発・提供をした、みなさまと作り上げたソリューションです
下記に限らず、研究分析の悩み・ご要望を是非お寄せください

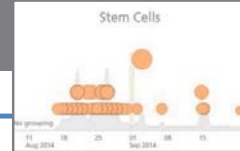


image: InCites B&A

InCites

ニーズ: 研究者・研究機関・国・分野別の研究力を様々な視点でいつでも自由に分析したい
ご提供サービス: 最新のInCites Benchmarking & Analytics及び現GC/IP等のアクセス提供

研究者別論文リスト作成(名寄せ)

ニーズ: 名寄せされた研究者別・学部別の分析をしたい／研究者総覧を充実させたい
ご提供サービス: 機関より頂いたリストを元に研究者別論文リストを作成、納品

セミカスタムレポート

ニーズ: 機関の研究力を分野別に可視化したい、競合機関との比較を簡単に行いたい
ご提供サービス: 指定頂いた分野／競合機関を元にレポートを作成、納品、報告会の実施

リサーチフロントデータ

ニーズ: 先端研究領域リサーチフロントと自機関の研究の関連を分析したい
ご提供サービス: Access形式にてリサーチフロントデータを提供
※サイエンスマップ2010&2012(NISTEP)に使用されているデータと同タイミング取得データ

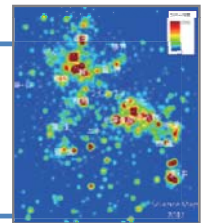


image: 「サイエンスマップ2010&2012」(NISTEP)
<http://hdl.handle.net/11035/2933>より引用

世界大学ランキングデータ

ニーズ: 大学ランキングのデータ(財務・研究者数・レピュテーション等)を分析・比較したい
ご提供サービス: 約800大学のプロフィールデータ(THE世界大学ランキング使用)を提供

たとえば、こんな疑問にお答えします

- 学内の評判等で「強み」をなんとなく把握しているが、他機関に説明しやすい客観的なデータが欲しい
- 同地域の他大学の強みや自大学との共通点等を客観的な情報で整理したい
- 今後大学として強化すべき分野やコラボレーションすべき大学を知りたい

Web of Science/InCitesの論文情報は下記のような学術・科学技術政策の基データとして利用されています(一部)


- ✓ 研究論文に着目した日本の大学ベンチマーキング2011
- ✓ サイエンスマップ2010&2012(NISTEP)
- ✓ 総合科学技術会議(内閣府)
- ✓ 科学技術白書(文部科学省)
- ✓ Times Higher Education世界大学ランキング(THE)

お問合せ／お見積依頼は...

トムソン・ロイター 学術情報事業 japan.ssrage@thomsonreuters.com
または担当営業までご連絡下さい。



THOMSON REUTERS™



プログラム
～ポスターセッション～

ポスターセッション

■URA 事業採択校ポスターセッション

U-01 京都大学におけるURAシステムの現状 2014
京都大学

U-02 信州大学 リサーチ・アドミニストレーションセンター
信州大学

U-03 URA整備事業 4年目の活動について
東京農工大学

U-04 新潟大学におけるリサーチ・アドミニストレーションシステムの整備
新潟大学

U-05 九州工業大学におけるURA事業の取り組み
九州工業大学

U-06 医学研究の支援・推進のための実務に特化したURA体制の実現とキャリアパス
東京女子医科大学

U-07 東京大学のURA育成に向けた取り組み
東京大学

U-08 「世界的研究拠点」のためのリサーチ・アドミニストレーションシステムの整備
大阪大学

U-09 新体制でより強固な研究支援の実現へ
名古屋大学

U-10 福井大学URAの特色と研究支援活動
福井大学

U-11 金沢大学URA組織の現状と未来
金沢大学

U-12 研究力IRとしての、研究力指標と財務指標との関係についての分析と考察-中規模国立大学群を中心とした考察-
山口大学

U-13 大学を支えるプロ集団を目指して
九州大学

U-14 筑波大学URA組織の定着に向けた活動について
筑波大学

U-15 北海道大学 URAステーションの取り組み - 約2年を振り返って
北海道大学

ポスターセッション

合同大会ポスターセッション

- | | | |
|------|---------------|-----------|
| (1) | URA 組織の紹介 | P01 - P13 |
| (2) | 研究力の調査分析 | P14 - P19 |
| (3) | 教育プロジェクト支援 | P20 |
| (4) | 国際連携支援 | P21 - P31 |
| (5) | 産学連携支援 | P32 - P38 |
| (6) | 地域連携支援 | P39 - P41 |
| (7) | 研究広報関連 | P42 - P48 |
| (8) | 安全管理関連 | P49 |
| (9) | 研究基盤の共用 | P50 - P53 |
| (10) | 人文社会学系支援 | P54 - P55 |
| (11) | 若手研究者支援 | P56 - P58 |
| (12) | 他部門との連携 | P59 - P62 |
| (13) | URA 育成・キャリアパス | P63 - P68 |

URA事業採択校ポスターセッション

U-01 京都大学における URA システムの現状 2014 京都大学

平成24年4月1日、京都大学学術研究支援室は8名のリサーチ・アドミニストレーターで発足した。その後、各部局の研究者と密に接しながら支援できる体制を整えるため、自主経費による「京都大学URAネットワーク構築事業」を立ち上げ、吉田キャンパス(6地区)、宇治キャンパス、桂キャンパスの計8地区に「部局URA組織」を設置した。さらに研究大学強化促進事業の採択に伴い、学術研究支援室は18名のURAを追加採用するに至った。新しくなった学術研究支援室の組織整備を中心に京都大学のURAシステムの現状を紹介する。

U-02 信州大学 リサーチ・アドミニストレーションセンター 信州大学

信州大学は、研究と産学官連携を高次元で融合する研究推進戦略を加速するため、その原動力となるURA体制をさらに強化する「リサーチ・アドミニストレーション・センター (URAセンター)」を平成26年4月に設置した。URAセンターには、URA室を始め、産学連携コーディネータ室や知的財産室が配置され、関連事務部門も交えた堅固な連携体制により、COI STREAMを始めとする大型拠点形成事業等を推進している。

U-03 URA 整備事業 4年目の活動について 東京農工大学

東京農工大学のURAシステムは順調に発展してきた。平成25年度には研究戦略センターと産官学連携・知的財産センターの統合により先端産学連携研究推進センターを設置し、平成26年度には農工大TLOの技術移転事業を継承した。本学は中規模研究大学の特色を活かし、URAを部局に配置せず本部に置き、全学的な視点で研究推進活動に取り組んでいる。4年目を迎えたこれまでの活動と今後の活動の展望、特に国際的な展開を紹介する。

U-04 新潟大学におけるリサーチ・アドミニストレーションシステムの整備 新潟大学

新潟大学URAは、①科研費や研究費の申請書チェック、教員と協力しての申請書の一部文章の作成、②新たな分野や分野横断的な領域での先端的で国際的な水準を持つ研究の発芽・発展のために特任教員等を配置して特徴ある研究グループを形成している超域学術院の支援、③研究費情報の収集と学内周知などの業務を行うことにより、若手研究者をはじめとする研究者を支援し、研究水準の向上に取り組んでいます。

U-05 九州工業大学における URA 事業の取り組み 九州工業大学

当センターのミッションは、従来から高く評価いただいている地域貢献・産学官の連携を更に強化していくことにあります。既存の産学連携推進センターとともにイノベーション推進機構を構成し、地域貢献・産学官連携に参加する研究者の頂点をより高く、参加者をより広くして、地域貢献を向上・加速させることを目指しています。

U-06 医学研究の支援・推進のための実務に特化した URA 体制の実現とキャリアパス 東京女子医科大学

本学では、事務経験を有する事務系URAと、研究経験を有する研究系URAからなるチームを編成し、基礎から臨床応用に至る多様なOJTを遂行してきた。現在、産学連携、研究倫理・知財等、各URAの専門性に応じた協働作業を展開している。今後、臨床研究支援センターとの連携も密にし、医学研究支援・推進に資する実務に特化した体制を更に充実させると同時に、各々のキャリアパス形成も視野に入れて事業を進めていく予定である。

URA事業採択校ポスターセッション

U-07 東京大学の URA 育成に向けた取り組み 東京大学

近年東京大学では、URA十数名が本部および各部局で実績をあげ、URAらの知識・ノウハウが蓄積されてきた。本学では、この知識・ノウハウの蓄積と、文部科学省の委託事業（平成23-25年度）で作成されたスキル標準や研修・教育プログラムの成果とを活用し、本学で働くURAを目指す者全員を対象とした研修プログラムを開発するとともに、URAの資格制度を検討している。本発表では、このような東京大学のURA育成に向けた取り組みを紹介する。

U-08 「世界的研究拠点」のためのリサーチ・アドミニストレーションシステムの整備 大阪大学

大阪大学は文部科学省「リサーチ・アドミニストレーションシステムの整備」事業の「世界的研究拠点整備」タイプに平成24年度に採択されて、既存の研究支援組織を拠点として、総長の強いリーダーシップのもとでリサーチアドミニストレーションシステムの整備を進め、事業計画の最終年度を迎えました。世界トップレベルの研究型総合大学を目指して全学の教員・事務系職員と協働して進めている活動を紹介します。

U-09 新体制でより強固な研究支援の実現へ 名古屋大学

名古屋大学は、より強固な研究支援を実現するため、URA室、産学官連携推進本部、研究推進室を統合し、平成26年1月1日に学術研究・産学官連携推進本部を発足させた。現在約40名のURAが、企画戦略、地域連携・情報発信、プロジェクト推進、知財・技術移転及び国際産学連携・人材育成の5グループおよび安全保障輸出管理担当に所属している。当本部および各グループの役割や、活動状況、本学におけるURAのキャリア制度の構築状況を紹介する。

U-10 福井大学 URA の特色と研究支援活動 福井大学

福井大学のリサーチ・アドミニストレーション体制は、産学官連携研究開発推進機構の枠組みの中、URAオフィスと産学官連携本部で構成される。URAオフィスの特色は、第三の職である新設URAと研究推進課から出向の事務職員で編成されていることや、福井銀行から出向のURAが活動している点にあり、競争的研究資金への申請から研究成果の社会還元まで、一貫した研究支援業務を実施している。

U-11 金沢大学 URA 組織の現状と未来 金沢大学

金沢大学先端科学・イノベーション推進機構は、研究戦略立案支援、外部資金獲得支援、研究成果等の情報発信、知的財産活用、産学官連携支援などにシームレスに取組み、基礎研究から応用研究まで一貫した研究支援を行っている。ポスターでは、異分野研究の連携推進、全国的なURAネットワークの構築や中・上級URA研修プログラムの開発をはじめとするURAの資質向上に係る取り組みなど、金沢大学の研究力強化のための支援体制について紹介する。

URA事業採択校ポスターセッション

U-12 研究力 IR としての、研究力指標と財務指標との関係についての分析と考察 - 中規模国立大学群を中心とした考察 - 山口大学

大学改革が多くの国立大学に求められている。外部競争的資金獲得の大学間の競争や、基盤的な運営資金の漸減という環境の中で、研究投資と教育投資について、各大学にはより難しい選択を求められている。そうした問題意識について、何らかの示唆をえるために、自大学が属する中規模大学を中心に、大学の研究力指標と財務指標を分析・考察した。国立大学の財務状況については、先行研究¹⁾があるが研究力指標との関係についての考察はなされていない。本発表では、大学の事業規模を示す経常費用、研究の主体者である教員規模、大学が研究に使う経費、研究者に渡る総研究費、その結果としての、論文数を指標にした研究力との相互の関係について、大学タイプ別の違いや中規模校の特徴について考察した。

U-13 大学を支えるプロ集団を目指して 九州大学

九州大学URA機構には、研究分野の専門性だけでなく、分析・企画・戦略立案、国際法務、広報、産学官連携、大学事務、企業経験者、外国人を含む海外居住経験者など、様々な背景のURAが所属しています。これら多種多様なバックグラウンドを活かし、本学の掲げる「九大百年 躍進百大」を実現するプロ集団として、様々なレベル・分野の研究者のニーズに応えるべく、より広く深く研究支援に資することを目指しています。本ポスターでは、これまでの実績を踏まえ、今後の活動方針と目標を紹介します。

U-14 筑波大学 URA 組織の定着に向けた活動について 筑波大学

筑波大学URA研究支援室は、研究経験のある若手を主軸としながら、研究マネジメント、企業プロジェクト支援等にも通じ、国際経験も豊かな多彩な人材で構成されています。大学本部における全学的研究戦略支援を起点とし、現在は、全学的支援体制構築に向けた産連部門、部局との組織的、人材的連携を模索しております。本ポスターではその経過と現状について報告します。

U-15 北海道大学 URA ステーションの取り組み - 約2年を振り返って 北海道大学

本学がURA事業に採択されURAステーションが設置されてから、約2年を迎える。当初想定されていたとおりのこと、状況の変化、設置後に直面した課題、それらにどう対応しようとしているのか…。アンケートとディスカッションで、URAステーションの中の人のホンネに迫りつつ、URAステーションの活動・取り組みの現状を紹介する。

合同大会ポスターセッション:(1)URA組織の紹介

P01 奈良先端科学技術大学院大学における URA の取り組み

○奈良先端科学技術大学院大学

奈良先端科学技術大学院大学におけるURAの取り組み体制並びに目標についての概要を説明する。

P02 奈良先端科学技術大学院大学における URA の組織体制

○奈良先端科学技術大学院大学

奈良先端科学技術大学院大学におけるURA組織の体制概要を説明する。

P03 岐阜大学リサーチ・アドミニストレーターについて

○馬場 大輔、安部 恵祐(岐阜大学 研究推進・社会連携機構)

岐阜大学は、平成24年8月より独自予算でURAを配置し、学術理事の下、研究マネジメントに注力している。岐阜大学URAは、研究者データベースの作成、各種研究資金の情報収集・発信、申請書作成支援、教員のアウトリーチ活動および安全保障輸出管理等のコンプライアンス管理を行っている。現在は、科研費採択増加に向け、研究者の採択状況を解析した上で獲得支援に重点的に取り組んでいる。本発表では岐阜大学URAの活動について紹介する。

P04 京都大学学術研究支援室の新体制とその取り組み

○杉山 梨恵、関 二郎、天野 絵里子、杉原 忠(京都大学 学術研究支援室)

京都大学学術研究支援室は、学内8地区の部局URA組織や全学研究支援組織と密接に連携しつつ効果的な研究支援を行って、研究力強化に貢献することを目指しています。文部科学省「研究大学強化促進事業」の採択をうけ、学術研究支援室では、さらなる研究支援機能の強化に向けて、業務内容に応じた4部門制を導入するとともに、大幅なURA増員を行いました。同室統括・企画部門が、新体制のもとでの各部門の取り組み・活動実績等を紹介します。

P05 東京医科歯科大学の URA 活動

○玉村 好司、木原 哲郎、眞峯 隆義(東京医科歯科大学リサーチ・ユニバーシティ推進機構)

東京医科歯科大学では平成25年度文部科学省「研究大学強化促進事業」に採択され、本学としては、「優れた人財の確保」、「研究環境の整備」、「ガバナンス強化」、「産学連携の推進」に加え、「URA室の設置」という5つの取組を推進していくことになりました。URA室では、外部資金獲得の支援などを行う「研究費獲得ランチ」、研究レベルのアップと研究戦略の策定などを行う「研究力強化ランチ」に加え、本学が医療系総合大学であることをふまえて、治験・臨床研究のサポートなどを行う「先進医療展開ランチ」を設け注力しています。

P06 国立天文台における URA の取り組み

○小林 秀行(自然科学研究機構 国立天文台)

国立天文台は、天文学の研究・教育を目的とする全国大学共同利用機関である。ハワイ・すばる望遠鏡を始め、チリに日米欧で共同建設ALMA望遠鏡、国内では野辺山45m電波望遠鏡などの大型観測装置を建設・運用し、共同利用に供している。また、国際協力によるTMT望遠鏡計画も開始された。国立天文台では、これらの大型プロジェクトを推進するために、早くから講座制を廃し、プロジェクト制によって研究を推進している。その中で、URAの職務は、研究者や技術者によって行われていたが、企業などから人材を求め、URA職員を配置しているが、未だ過渡期にある。これらの国立天文台における取組を紹介する。

合同大会ポスターセッション:(1)URA組織の紹介

P07 長崎大学 URA の研究支援活動～研究型総合大学を目指せ

○王 鴻香、山口 陽子、門脇 知子、調 漸(長崎大学 研究推進戦略本部)

長崎大学では、2012年12月に自主経費により研究推進戦略室が発足し、2014年4月に学長直属の研究推進戦略本部へと改組された。学長直下に配置されたURAが全学的な研究戦略の立案に関わっており、学内の研究支援体制の中核となりつつある。現在、研究戦略立案の基礎となる研究力の分析、プレアワード業務を中心とする外部資金獲得支援等研究力を強化していくための多彩な支援活動を行っている。本発表では、本学の研究型総合大学を目指したURA活動を紹介する。

P08 順天堂大学における研究支援に取り組む人々

○菅原 剛彦、高野 秀一(順天堂大学 研究推進支援センター)

順天堂大学に研究支援人材URAが採用されてから2年が経ちました。分室から始まり、現在では研究推進支援センターを立ち上げ、大学全体の研究支援を担う部署として新しい組織体制での活動に入っています。今回、医学・看護・スポーツ系の健康総合大学におけるURAの活動を振り返るとともに、女性研究者の支援など順天堂大学における研究支援に取り組む人々を紹介します。

P09 研究大学強化促進事業のオーガナイズ (URA の役割)

○橋本 俊幸、藤井 弘樹、小島 珠世、吉松 勇、越前谷 義博、平尾 敏(電気通信大学 研究推進機構研究推進センター 研究企画室)

研究大学強化促進事業が開始され、種々の取り組みがスタートする中、URAには、大学の研究力の分析、研究コンサルティング、学内外の研究者間・機関間のコミュニティ形成、科学技術・産業政策の動向把握など多種多様な役割が期待される。本ポスターでは、本学のURA制度について紹介するとともに、「研究力強化とは何か?」、「大学の価値創造とは何か?」等の観点から、URAの果たすべき役割を議論したい。

P10 北海道大学における研究大学強化促進事業の取組

○岡田 直資(北海道大学 URAステーション)

北海道大学では、研究大学強化促進事業によって目指すビジョンを「グローバルな研究活動を通して世界の課題解決に貢献すること」とし、総長直轄機関「次世代大学力強化推進会議」の設置・研究戦略企画の専門職「URA職」の創設等の研究ガバナンス改革、次世代型産学連携の推進、研究人材の多様化の推進、組織連携による国際共同研究の拡大などに取り組んでいる。事業開始から1年間の取組の実施状況を紹介する。

P11 神戸大学 URA の取組みと文理融合プロジェクトの事例

○犬伏 祥子、吉田 一、富田 克彦、岩崎 之勇、寺本 時靖、瀧 和男(神戸大学 学術研究推進本部)

神戸大学は平成25年度文部科学省研究大学強化促進事業に採択され、6名のURAを配置しました。URAは(1)競争的資金、科学研究費およびCRESTさきがけの採択状況の改善、(2)国際化、(3)若手育成支援および(4)プロジェクト創成支援に重点をおいて活動しています。本発表では、神戸大学URAの紹介と、分野横断の大型プロジェクト創成のうち特に文理融合型プロジェクトの取組みについてご紹介します。

合同大会ポスターセッション:(1)URA組織の紹介

P12 首都大学東京 URA 室の研究支援について

○國政 浩、金子 美智子、阿部 紀里子、桜井 政考(首都大学東京 総合研究推進機構URA室)

首都大学東京は、平成26年4月に、大学の研究活動を基礎研究から社会還元までをトータルに支援するURA室を新設しました。研究者がどのような支援を必要としているのか、これまで支援が不足していた部分はどこか、現場の研究者の声に耳を傾けながらオーダーメイド的な研究支援を実施している。研究支援グループ、国際支援グループ、戦略広報グループからなるURA室の具体的な活動事例について紹介する。

P13 ROIS-URA の紹介：皆さんとの意見交換が希望

○野水 昭彦¹、北村 浩三²、岡本 裕子³、磯野 靖子⁴(¹情報・システム研究機構、²情報・システム研究機構 統計数理研究所、³情報・システム研究機構 国立情報学研究所、⁴情報・システム研究機構 国立極地研究所)

H25年度設置された当機構URAステーションの紹介。広報活動を中心にして、体制や活動全般について紹介します。各大学等のURAの方々と意見交換できれば幸いです。

合同大会ポスターセッション:(2)研究力の調査分析

P14 英国の研究評価システム REF とそれへの大学の対応

○白井 哲哉(京都大学 学術研究支援室)

英国行政機関のHEFCEはResearch Excellent Framework (REF)と呼ばれる研究の質を評価するシステムを作っている。大学はこのREFの指標にあわせた研究成果レポートをHEFCEに提出し、それをもとに各大学の研究の質が評価され、大学への交付金の配分額が決められている。このREFのシステムと、この研究評価システムに対応するための英国Bristol大学の研究支援体制について紹介する。

P15 引用文献分析に基づく研究評価の課題と展望

○福島 洋、清家 弘史、Hansen Marc、根本 靖久(東北大学 研究推進本部URAセンター)

研究の成果である論文の数や被引用数は、研究者、機関、国などの研究活動を評価するための尺度として使われている。近年、InCitesやSciValなどのツールが開発され、詳細な分析を効率よく行うことが可能となってきているが、これらを用いれば自動的に有用な結果が得られるというわけではない。特に、分析の具体的な目的をまず明確にし、それを達成するための方法を検討することが重要である。本発表では、これらの点に留意しながら分析を行った成功事例を紹介し、課題や展望について議論する。

P16 大学研究力の把握と発信について

○齋藤 憲一郎、諏訪 桃子(東京農工大学 先端産学連携研究推進センター)

大学の研究推進企画のために、まず研究力の把握が重要である。これは主として研究成果の調査から始まる。現在のところ、アプローチは専ら論文の被引用分析に限定されている。一方で学術分野ごとの文化・土壌により成果の発信方法は一様ではない。すでに定着した感のある被引用分析においても、実務レベルでの課題は多い。また、研究成果の発信強化も重要な課題である。既存の学内組織と連携した実践例を示し、課題を共有したい。

P17 大学のポジショニング分析と組織的な研究支援体制構築

石本 太郎、栗原 翔吾、○新道 真代、森本 行人(筑波大学 URA研究支援室)

Times Higher Education (THE) や Quacquarelli Symonds (QS) が発表する世界大学ランキングに注目が集まっており、筑波大学でも、10年後の目標の一つとして「世界大学ランキング 100 位入り」を掲げています。この目標を達成するために、筑波大学 URA 研究支援室では、各ランキング公表機関が 2013 年に使用した採点ルールの調査、内容の精査を行い、現時点での筑波大学のポジショニング分析を行いました。また、これらの情報を参考に組織的な研究支援体制の構築に挑戦中ですので、その進捗を併せて発表します。

P18 教育研究活動データベース充実化の取り組み

○今井 敬吾¹、古村 隆明²(¹ 京都大学 学術研究支援室、² 京都大学 情報環境機構)

京都大学の研究力分析の網羅性向上のため、過去10年分の文献情報を全学60部局から収集し、京大の「教育研究活動データベース」に投入した。専用の名寄せアルゴリズムを活用することにより、研究者のデータ入力負担を軽減すると同時に、Web of Science, Scopus, JGlobal等の外部文献データベースや図書館リポジトリとの参照関係を構築した。これにより、京大の多様な研究成果の分析基盤を整備できた。本プロジェクトの成果と、判明した多くの課題について紹介する。

合同大会ポスターセッション:(2)研究力の調査分析

P19 大学の「研究力」を考える

五十畑 浩平¹、柳生 勇²、○山田 朗³、山本 祐輔⁴(¹香川大学 研究戦略室、²名古屋工業大学 産学官連携センター、³愛媛大学 先端研究・学術推進機構 教育研究高度化支援室、⁴京都大学 学術研究支援室)

大学の研究機能強化において、大学が持つ持続的な「研究力」の把握がURAなど大学関係者の日常活動の指針になるだろう。抽象的な「研究力」概念だが、論文分析・外部資金などの指標による側面からの捉え方、各大学の歴史的・位置的特性を踏まえた捉え方など、様々な考え方が想定できる。本ポスターでは、「研究力」の意味を、各大学に共通する部分や独自に特色を持つ部分など、異なる大学に所属するグループによる議論を展開する。

合同大会ポスターセッション:(3)教育プロジェクト支援

P20 URAの教育プログラムへのとりくみ

○天野 麻穂¹、難波 美帆¹、中司 展人²(¹北海道大学 URAステーション、²北海道大学 女性研究者支援室)

北海道大学は、今年度のJST「グローバルサイエンスキャンパス」事業採択校のひとつである。本演題では、チームビルドから申請書作成、ポストアワードまで、どのようにURAが支援を行ったかについて報告する。さらに本事例から、University RESEARCH administrator が、教育関連事業を通じ、いかにして教員の、ひいては大学の研究力強化に貢献しうるかについて考察を行いたい。

合同大会ポスターセッション:(4)国際連携支援

P21 研究者ネットワーク分析による国際研究支援ツール構築

○橋爪 寛、河本 大知(京都大学 学術研究支援室)

研究の多様化・国際化が加速する中、新たな異分野融合、研究グループが続々と生まれ、研究者が手にする国際共同研究の機会は増えてきた。このような時流の中で必要なことの1つとして、研究グループや研究者が形成するネットワーク構造ならびにその推移を把握した上で、研究プロジェクトを戦略的に設計することが挙げられる。本ポスターでは、これらの状況を鑑み、既存のツールを用いたデータ解析に加え、動的な研究者ネットワーク分析に基づいた新たな研究支援ツール構築の試みを紹介したい。

P22 奈良先端大における国際共同研究室の新たな取り組み

○三宅 雅人(奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究推進センター)

各大学はこれまでに留学生の獲得や研究者の交流を推進するために積極的に海外展開を行っている。しかしながら研究推進という観点からは、あまり進展がみられないのが現状である。そこで本学では海外の大学に、従来の共同研究のみならず、近隣諸国の研究者や新たな研究テーマを発掘する機能を持った海外拠点を設置するプロジェクトを進めている。また、これと並行して本学内に、海外の指導者による研究室を新たに設置し、国内外の双方向による国際化を推進させるプロジェクトも同様に進めている。本発表では、設置先などの詳細について紹介する。

P23 寒冷な北方隣国と北大との熱い関係

○小俣 友輝、田中 晋吾(北海道大学 URAステーション)

地球環境の激変に呼応して、世界の学術界、経済界等において様々な動きが見え始めている。北海道がロシア極東と経済的な結びつきを深める中で、北大はロシア極東・北東の数大学と教育の絆を構築しつつある。共同研究等で培った当該地域の分野横断的な実績を次世代へつなぐ取り組みの片鱗をご紹介したい。

P24 北方圏を舞台とした新たな異分野連携推進の取り組み

○田中 晋吾、小俣 友輝(北海道大学 URAステーション)

いかにして大学の研究力向上を図るか。これは、国際社会でその地位を下げつつある日本の大学にとって喫緊の課題である。必要な対策は「国際共同研究」の推進と、「異分野連携」による新たな強み分野の創成で世界をリードすることである。北海道大学では、北方圏に関与する研究者と共に部局や機関を超えた情報交換ネットワークを立ち上げた。このネットワークを核とした国際異分野連携研究立ち上げの取り組みを報告する。

P25 Promotion of Internationalization through the Program for Promoting the Enhancement of Research Universities Tohoku Universitys Approach

○HANSEN Marc¹、清家 弘史¹、福島 洋¹、前田 吉昭²、根本 靖久¹ (¹東北大学 研究推進本部URAセンター、²東北大学 知の創出センター)

After Tohoku University was granted funding by MEXT under the Program for Promoting the Enhancement of Research Universities in 2013, two mobility schemes have been implemented to raise the quality and impact of research, thereby increasing the visibility of Tohoku University in the international landscape. This poster session will introduce to you Tohoku University's approach as a global intellectual hub to accelerate brain circulation, focusing on the inbound-oriented Tohoku Forum for Creativity, an international visitor research institute, and the outbound-oriented Leading Young Researcher Overseas Visit Program .

合同大会ポスターセッション：(4)国際連携支援

P26 挑戦！リサーチデベロップメント in 筑波大

○藤根 和穂(筑波大学 URA研究支援室)

URAが活動を始めて2年。外部資金の申請書作成に係るリサーチアドミニストレーション(RA)支援依頼が急増する中で、中長期的視点や他機関との連携を視野に入れた戦略相談、海外研究機関からのマッチング依頼など、リサーチデベロップメント(RD)的業務が発生し始めた。日米両国で外部資金申請に成功した2件の海外連携を含むRDの実例と、それら経験から得た知見を基に検討されるRD&RAシステム整備について報告する。

P27 京都大学学術研究支援室における国際共同研究の支援

○鮎川 慧(京都大学 学術研究支援室)

京都大学学術研究支援室・国際戦略部門は、2014年4月に発足して以来、本学の国際戦略 2x by 2020 に基づき、研究者の国際共同研究の支援活動を行っている。国際共同研究を育推進するための、国際シンポジウムの開催、海外拠点の設置・運営、外部資金獲得支援などである。さらに、大学の国際広報を強化し、研究成果の世界発信にも着手している。本発表ではそれらの一部を紹介する。

P28 研究大学における教育国際化戦略について：北海道大学の事例

○高木 由紀(北海道大学 URAステーション)

研究大学においては、研究活動の状況に応じ、様々な国際教育連携スキームを単独、または組み合わせることによる戦略的な教育活動を実施することが、研究力の強化にとって重要である。北海道大学における戦略的な国際教育連携スキームの導入とその実施内容について概要を紹介し、研究力強化への貢献という観点から評価する。

P29 部局 URA による国際活動支援

○岡野 恵子¹、吉岡 佐知子² (¹京都大学 南西地区URA室、²京都大学 宇治地区URA室)

部局において研究科や研究所、各研究者が行う国際的な活動は多岐にわたり、部局URAはその支援を行っています。部局URA設置のさきがけである京都大学から、これまでの支援活動の実際についてご紹介いたします。

P30 英文校正利用の現状調査：研究支援の視点からの分析

○三代川 典史、荒木 裕子、杉浦 仁美(広島大学 学術・社会産学連携室 研究企画室)

大学教員の研究成果である英語論文発表数を増やし、その質を高める支援を提供することは、国際的認知度向上による大学の研究力強化に資する取組といえる。本学では、英文校正に係る支援体制の整備は有効な施策の一つと考え、2014年7月に、全学の教員を対象に英語論文執筆時における英文校正に対するニーズ／意識調査を行った。この発表では、その結果を分析し、総合大学における教員の英文校正サービス利用動向や学内支援への期待やニーズを報告する。

P31 研究成果発信支援の視点から見るライティング・センターの役割

○姚 馨(大阪大学 大型教育研究プロジェクト支援室)

英語による研究成果発信の支援方策を検討することを目的に、国内外の大学ライティング・センターで実地調査を行いました。研究者向けのアカデミック・ライティング支援のヒントになりうる取り組みを紹介します。

合同大会ポスターセッション：(5)産学連携支援

P32 COI拠点の企画推進を通じた社会実装支援活動事例

○佐藤 準、白澤 基紀、清家 弘史、根本 靖久（東北大学 研究推進本部URAセンター）

東北大学のURAセンターでは、研究成果の社会実装に向けた戦略的な取組みを行っている。そのために当所が中心となって行うプレアワード・ポストアワード業務事例の一つとしてCOI-STREAMの拠点事業が挙げられる。将来社会のビジョンを見据えて産業界と連携して研究開発や知財プール化の仕組みを構築するなど、これまでにない特徴的な取組や試行例を紹介し、イノベーションの担い手としてのURAの役割を議論したい。

P33 東大 COI 発足における URA の役割

○林 輝幸^{1,3}、島田 昌^{1,2}、山上 圭司⁴、大内 聡美^{1,2}、後藤 孝明⁵、野田 正彦⁶（¹東京大学「若者と共存共栄する持続可能な健康長寿社会を目指す～Sustainable Life Care、Ageless Society COI拠点～」、²東京大学 大学院工学系研究科、³東京大学 大学院理学系研究科、⁴東京大学 TR機構、⁵東京大学 医学部附属病院、⁶科学技術振興機構）

東京大学は工、医、理、薬の四部局が連携して、「若者と共存共栄する持続可能な健康長寿社会を目指す～Sustainable Life Care、Ageless Society COI拠点」を開設した。本拠点は、少子高齢化の中で、今後の我が国の社会を持続可能とするために、入院を外来に、外来を家庭に、家庭で健康に変えて行くことを目指して、低侵襲診断・治療機器、低コスト医薬、医療ICT等を開発するものである。本報告では、拠点の申請から開設におけるURAの役割を明らかにする。

P35 産学連携プロジェクト支援の現場から

○栗谷 尚子（京都大学 先端医工学研究ユニット）

発表者は大型産学連携10年プロジェクトの7年目よりURAとして参画し、支援を行っている。URA導入以前、本プロジェクト運営は主に教員、事務職員、専門職員が担ってきた。既存の担当者との効果的な協働、URA独自の役割、学内機関との連携等に関して実例から抽出した課題・考察を紹介する。

P36 北大型イノベーション対話の新展開

○江端 新吾、難波 美帆（北海道大学 URAステーション）

北海道大学は、平成25年度大学等シーズ・ニーズ創出強化支援事業に採択され、フューチャー・サーチを改良した新たな対話手法「北大型イノベーション対話」を開発した。本成果を応用し、イノベーション（社会変革）を起こすべく動き出した新たな展開について紹介し、イノベーション対話とはなにかについて議論する。

合同大会ポスターセッション:(5)産学連携支援

P38 実用化のための知財戦略を伴う研究マネジメントの提案

○小柳 智義(京都大学 学術研究支援室)

産官学連携政策の成果により、多くの大学が特許出願の仕組みを構築し、研究者も研究成果の発表時に特許出願を強く意識するようになりつつある。一方で実際に実用化に至る研究成果は数少ない。本発表では大学の「社会貢献」をキーワードに、発明届けから始まる大学の知的財産の課題とそれに対するURAとしての解決の試みを紹介する。

合同大会ポスターセッション：(6)地域連携支援

P39 COI拠点の企画推進を通じた社会実装支援活動事例

○前田 敦子(東京海洋大学 産学・地域連携推進機構)

東日本大震災の復興を目的とした多様なプロジェクトが始動し、これらに東京海洋大学の研究者も多数参画している。本プロジェクトについて被災地へ集中的に成果還元をすることで利益を産みだすべく、知的財産取得の啓蒙活動を実施している。同プロジェクトの研究者も含めた参画者や被災者に向けて独占排他権である知的財産の取得を推奨し、被災地限定で成果が還元される重要性を説いている。本重要性は研究者から認識しだした。

P40 東京都の施策課題解決に資する連携プロジェクトの組成

○阿部 紀里子、長峰 亮太、國政 浩、桜井 政考(首都大学東京 総合研究推進機構URA室)

首都大学東京は、東京都のシンクタンクとして都の施策課題解決に資する都連携プロジェクトを研究活動を1つの柱としており、6年前から大学研究者から都への「施策提案発表会」を毎年実施している。都連携のマッチング確度と実効性をあげるために、ポスター展示や東京都から大学研究者への「都事業説明会」、施策提案を促進する「スタートアップ調査制度」等の様々な企画や仕掛けにより都連携プロジェクトの組成を図っている。

P41 明石高専の地域連携活動における URA の役割

○佐伯 亮太(明石工業高等専門学校 教育・研究プロジェクト支援室)

明石高専は教育・研究・地域連携の3つを使命としている。しかしながら、地域連携は準備から活動までに多くの時間と労力が必要である。大学と異なり、教育に多くの時間を割く高専教員は地域連携への取り組みがおろそかになりがちである。本校URAは学外からのニーズを拾い、プロジェクトの立ち上げ、マネジメントをおこなう。地域連携活動は、これまでの産学連携と異なり、低学年(15才)でも参加可能な行政、企業、NPOとの協働によるCSRとしての活動が中心である。

合同大会ポスターセッション：(7)研究広報関連

P42 理事、こんなパブリックエンゲージメントどうでしょう

○難波 美帆、高木 由紀、小俣 友輝(北海道大学 URAステーション)

世界最大のPR会社エデルマンは、「パブリック・リレーション(PR)からパブリック・エンゲージメントへ」という考えを提唱しています。エデルマンのCEO、リチャード・エデルマン氏によれば、「行動」と「対話」により、信頼を得、目的を共有し、より良い関係を構築するのが「パブリック・エンゲージメント」です。大学が、地域を中心とする市民社会や産業界から信頼を得、目的を共有し、よりよい関係を築くために、一方的な広報から、パブリックリレーションを超えて、さらにパブリック・エンゲージメントへ。大学執行部のみなさんに、URAから提案いたします。

P43 研究力紹介動画制作と海外展開について

○藤綱 義行(東京農工大学 先端産学連携研究推進センター)

研究力を向上させるために、保有する研究力を紹介し、適切なアカデミア連携先を国内外に求めることが必要である。また、産学共同研究などを強化し、本学が持つ技術の社会実装を推進するためにも本学の研究力を世界に広報することが重要である。昨年度に研究力紹介動画を製作して、本年4月下旬にホームページなどで公開した。制作プロセスで生じた経験をRA各位と共有し、海外展開に活用する仕方について意見を交換したい。

P44 「国民との科学・技術対話」の促進と支援の取り組み

○仲野 安紗、白井 哲哉、森下 明子(京都大学 学術研究支援室 学際融合部門)

2010年に出された内閣府による基本方針「『国民との科学・技術対話』の推進について」を受け、京都大学では「国民との科学・技術対話」WGを設置し、本質的な研究者と国民との対話のあり方を探究しています。その取り組みの1つとして、「京都大学 アカデミックデイ」をURAと教職員との協働で企画しています。本発表では、具体的な活動事例と共に、「国民との科学・技術対話」を通じた研究者支援の在り方を紹介します。

P45 URA チームにおけるアウトリーチ支援の取り組み

○岩崎 琢哉、川人 よし恵(大阪大学 大型教育研究プロジェクト支援室URAチーム)

大阪大学大型教育研究プロジェクト支援室URAチームでは、企画調整のノウハウ提供と職員研修(イベント実施OJT)から構成される協働の場を作り、アウトリーチ活動サポートの実務に取り組んでいます。この発表では、具体的な活動事例とツールを紹介させていただきます。阪大URAメルマガの川人編集長も参加の予定です。どうぞお見逃し・お聞き逃しなくお声がけよろしく願いいたします。

P46 世界は広いよ～研究成果を海外のメディアへ！

○今羽右左 デイヴィッド 甫(京都大学 学術研究支援室)

「海外でもニュースになって欲しい研究成果等がある。何から始めればいいのか?」を起点に、何をどう書いてどこに送るかといった初歩から、配信サービスの選択やライティングの戦略などを紹介。これを機に世界に羽ばたこう!

合同大会ポスターセッション:(7)研究広報関連

P47 サイエンス・コミュニケーション：グローバル・パースペクティブ

○トミー イム、Larissa Kogleck (Macmillan Science Communication)

「Publish or perish」(発表せよ、さもなくば滅びよ)の思想から「Engage or expire」(つながれ、さもなくば道は塞がれる)と時代は変化し、研究者または研究機関は自分自身の存在意義、研究成果が社会へ対するインパクトなどを証明する必要があります。このプロジェクトの目的は、研究機関にとって「サイエンス・コミュニケーション」の意義を問いながら、国内外のケーススタディを通じて、有効な手法および理論をわかりやすく解説する。

P48 URA だからこそ可能な【研究 PR 冊子】を創ろう !!

○杉坂 恵子(京都大学 学術研究支援室)

京都大学学術研究支援室では、本学の研究力PRの一環として、研究成果(あるいは研究者)を国内外に紹介する冊子を企画制作しています。理系出版社勤務を経てURAとなった発表者は、業務を通じ、「URAという立場だからこそ創ることのできる冊子」の存在をつくづく感じました。そこで本ポスターでは、発表者がこれまで京都大学で企画制作した刊行物を展示しながら、URAが大学の研究PR冊子制作を担う意義とメリット(および、若干の課題も?)を報告します。

合同大会ポスターセッション:(8)安全管理関連

P49 大学等の名古屋議定書対応体制の構築

○鈴木 睦昭、榎本 美千子(情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所 知的財産室 ABS学術対策チーム)

海外からの動物、植物、微生物を研究用に入手し使用する場合は、今後、名古屋議定書の対象となる。名古屋議定書は本年10月12日の発効が予定されている。日本は批准していないが、対応体制の準備を行う必要がある。大学における研究材料の受け渡しは、法的、契約業務としてURA業務となる。本発表では、名古屋議定書に関する現状と大学での対応体制についての課題などの説明を行う。

合同大会ポスターセッション：(9)研究基盤の共用

P50 研究基盤強化としての DNA シーケンス施設の整備

田上 款、○喜多山 篤(京都大学 宇治URA室)

研究戦略推進支援業務

京都大学宇治地区4研究所(化学研究所、エネルギー理工学研究所、生存圏研究所、防災研究所)の研究基盤強化を目的として、共通利用機器施設の整備を行った。ライフサイエンス系の研究では日常的な基盤技術となっているDNAシーケンスを、学内に受託解析サービスとして提供する施設を構築した。顕在化した課題や今後の展望などを含め、企画段階から現在までの運営状況を報告する。

P51 グローバルファシリティセンター構想

○江端 新吾(北海道大学 URAステーション)

研究戦略推進支援業務

現在、学内の一組織が運営する先端研究設備共用(オープンファシリティ:装置数108台、年間延べ利用者数22,000人)を全学規模(装置数330台)に拡充し、これに係る教員と技術者(約100名)が連携する運営組織「グローバルファシリティセンター」を創設する予定である。本構想案の企画立案からURAがどのように携わってきたのか、URAはどこまで大学の研究基盤戦略に食いつめるのか等について紹介する。

P52 スパコンの活用による共同利用・共同研究の利用促進

○本多 啓介、岡本 基(情報・システム研究機構 統計数理研究所 運営企画本部企画室URAステーション)

統計数理研究所(以下、統数研)は全国の国公私立大学をはじめとする研究者との共同利用を推進しており、研究者との共同研究を通して、統計に関する数理及びその応用の統計学の発展に貢献しています。統数研の研究資源の柱の一つとしてスパコンがあり、統数研URAの重要なミッションの一つは、このスパコンの利用促進です。スパコンを活用した研究開発IT基盤の提案・開発や外部研究資金獲得のための提案・積極的な応募、企業との共同研究への参加など様々な活動を行っています。

P53 研究力の強化に資する学術情報基盤の共創を目指して

今井 和雄、笹山 浩二、蓮池 岳司、○岡本 裕子(情報・システム研究機構 国立情報学研究所 研究戦略室)

国立情報学研究所(NII)は、大学等との連携により学術情報ネットワーク、認証基盤及び学術コンテンツ基盤から構成される学術情報基盤の整備を推進し、学問全体の進展と大学・研究機関の研究力強化の寄与に取り組んでいる。学術情報基盤の推進にあたっては、「共に考え、共に創る」ことが重要であることから、研究力強化の支援活動を行っているURAの方々への理解向上や学術情報基盤に関する情報交換を図る契機とすることを目的に、次期学術情報ネットワーク(SINET5)を中心とした学術情報基盤について紹介する。

合同大会ポスターセッション：(10)人文社会学系支援

P54 「人社系分野への研究支援と研究評価」セッションを経て

○森本 行人¹、稲石 奈津子²、川人 よし恵³、白井 哲哉⁴(¹筑波大学 URA研究支援室、²京都大学 本部構内(文系)URA室、³大阪大学 大型教育研究プロジェクト支援室URAチーム、⁴京都大学 学術研究支援室)

日本国内だけでなく、海外でも人社系分野における研究支援が注目されています。しかし、組織的な人社系支援が成功している大学・機関は少なく、手探りで進めているところがほとんどです。このような状況を改善するため、人社系分野の研究支援の取り組みについて、いくつかの先進的なチャレンジをボトムアップ型支援・トップダウン型支援に分けて紹介します。また、後半はパネルセッションとして、フロアとのディスカッションを通じ、人社系分野への研究支援と研究評価のグッドプラクティスを探っていきたいと考えています。

P55 研究者ネットワーク構造解析に基づく人文社会系研究者ランキング

○河本 大知、山本 祐輔、今井 敬吾(京都大学 学術研究支援室)

研究代表者-共同研究者を結ぶ「研究者ネットワーク」の構造に着目し、人文社会系研究者の評価・ランキングを行う手法を提案する。更に、理工系・医薬生命系の研究者に提案手法を適用した結果を、論文の被引用数・執筆数に基づく研究者評価と比較することで、本提案手法の研究者評価手法としての代替可能性について議論する。人文社会系分野では、理工系・医薬生命系分野のように論文データベースが整備されていない上に、学術成果が論文以外の形式で発信されることも多く、論文の被引用数や執筆数を用いて研究者を評価することが難しいことが知られている。本提案手法を用いることで、新たな視点で人文社会系研究者のインパクトを評価することが可能になる。

合同大会ポスターセッション: (11)若手研究者支援

P56 「研究者の卵」支援のための実態調査

○渡邊 皓子、仲野 安紗、森下 明子、山本 祐輔(京都大学 学術研究支援室)

京都大学にはさまざまな支援制度・組織があり、その対象は研究者、ポスドク、学生など実に様々です。しかし意外にも、「研究者の卵」向けの支援は、これまでもその必要性が認識されてきましたが、まだ全学的なものがありません。そこで、まずは学術振興会特別研究員の申請者向けサービスを検討するため、実態調査アンケートを実施しました。そこから何が見えてきたのか、その一部をご紹介します。

P57 「前途有望な研究者」のための研究力強化

○来栖 光彦、伊東 真知子、小林 百合、須田 知栄子、広海 健(情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所)

「前途有望な怪物(Hopeful Monster)」とは、20世紀の遺伝学者リチャード・ゴールドシュミットが提唱した進化論であり、一世代で飛躍的な進化を遂げることを指す。氏の所有した5万件に及ぶ文献は、ゴールドシュミット文庫として遺伝研の書庫に保管され、現代の研究者を見守っている。

遺伝研リサーチ・アドミニストレータ室は2014年4月に設置され、研究者が超躍進化するための様々な試みを始めた。私達が未来を支える「前途有望な研究者」たちと共にいる活動についてご紹介する。

P58 異分野コラボレーション活動による若手の学際研究支援

○藤村 維子¹、才田 淳治¹、鈴木 一行¹、井原 聡²、沢田 康次²、畠平 明²、橋本 圭一¹、山谷 知行²、佐藤 正明¹(¹東北大学 学際科学フロンティア研究所、²東北大学 国際高等研究教育院)

東北大学では、異分野融合、学際研究促進のための取り組みとして、将来アカデミアを目指す選抜された大学院生(研究教育院生)と学際科学フロンティア研究所教員との間で異分野コラボレーション活動を行ない、相互の交流を深めています。本発表では、若手研究者が積極的に異分野コラボレーション活動を企画、実施したこれまでの取り組み、参加者の感想などをご紹介します。URAの役割を考察します。

合同大会ポスターセッション：(12)他部門との連携

P59 ゼロからのスタート～ポスト・アワード支援を問い直す

○畑 真由美¹、磯部 靖博²、島田 文子¹、井上 望²(¹広島大学クロマチン動態数理研究拠点、²広島大学 学術・社会産学連携室 研究企画室)

広島大学は、優れた研究グループを研究拠点として認定し支援する「研究拠点形成システム」を採用し、3層のURA(シニアURA、URA、アソシエイトURA)の区分の下、学術系・専門系・事務系の協働による研究支援を行っている。本発表では、研究拠点形成システムにおいて研究拠点(自立ステージ)として認定したクロマチン動態数理研究拠点への本部URAと拠点URAの協働による支援事例を紹介し、いわゆるポスト・アワード支援についてのあり方を議論する。

P60 URA 業務を担う大学事務職員：そのマインド・課題

○花岡 宏亮(大阪大学 研究推進部大型教育研究プロジェクト支援事務室)

現在、URAの職務内容やスキル標準の整備が進められており、今後、各大学の特性によるカスタマイズが進んでいくものと思われる。一方、URAの職務内容には大学事務職員も業務の一部を担っているものが存在し、また、大学事務職員の職域も研究者等のニーズにより変化している。本発表では、URAの職務内容を担っている大学事務職員のマインドや活動を事例として取り上げ、研究者の研究活動活性化のための環境整備等に向けた課題やURA職との協働について考察する。

P61 部局ボーダレスなアメーバ型 URA 活動への展望

○臼澤 基紀、清家 弘史、佐藤 準、福島 洋、Hansen Marc、根本 靖久(東北大学 研究推進本部URAセンター)

東北大学ではURAセンターに「URA連携協議会」事務局を設置し、全部局のURAならびに関連職とのボーダレスな横方向の連携によるアメーバ型活動展開の強化を目指している。「URA連携協議会」では本学URAに期待される役割やスキルについて議論を深めるだけでなく、全学的視点から種々の課題を抽出し、早期に解決に導くための提案をする。その一方で、学際研究や融合研究を醸成推進する基盤としても活用することも目指している。

P62 早稲田大学アカデミックソリューションによる研究支援

一宮 航、高輪 めぐみ、須田 明子、○會沢 優子((株)早稲田大学アカデミックソリューション)

(株)早稲田大学アカデミックソリューションは、早稲田大学のグループ企業として、教育・研究の両面から大学運営に役立つ様々なサービスを提供しています。今回は研究事業企画部(旧早稲田総研イニシアティブ)による事業の一例として、大学の研究成果を地域の課題解決に役立てる取り組みをご紹介します。研究支援の専門人材の参画により、研究成果の実装、新しい研究テーマの開拓やシームレスなプロジェクト展開を可能にする体制を構築しています。

合同大会ポスターセッション:(13)URA育成・キャンパス

P63 URAの評価について考える

○山田 光利¹、栗谷 尚子²、原田 隆³、山田 朗⁴、五十畑 浩平⁵ (¹ Smips・研究現場の知財分科会、² 京都大学 先端医工学研究ユニット、³ 東京工業大学情報生命博士教育院、⁴ 愛媛大学 先端研究・学術推進機構 教育研究高度化支援室、⁵ 香川大学 研究戦略室)

URA組織への評価としては、外部資金獲得への貢献度が前面に出ていることが多いが、その点に違和感を感じる実務者は多い。他の評価軸について、またURAが個人で/単体で評価されるべきか、そもそも誰に評価されるべきかなど、大学内外のURA以外の組織と比較しながら、様々な背景をもつ有志で行った議論を紹介する。

P64 URA かるた : URA 業務の理解・共有を促進するゲーム教材

○山本 祐輔(京都大学 学術研究支援室)

URA業務の情報共有・スキルアップのために、URAシンポジウム・研究会に参加したり、自分自身でもURA育成カリキュラムの設計、実施に携わってきましたが、運営者側の期待とは裏腹に「URA業務の理解」「URA同士の情報共有」「URA業務に関する学習」が進んでいないような気がしていました。URAの学習環境や相互研鑽をより良くできないか?そう思い「URAかるた」とそれを用いたゲームのプロトタイプを開発しました。

P65 Reflect & Learn: 先進事例調査の活かし方

○望月 麻友美(大阪大学 大型教育研究プロジェクト支援室)

How exactly should we use Good Practice to improve our work? 我々日本版URAは、豊富な実績を有する海外の研究支援組織の事例調査をすることがあります。このポスターでは、デンマーク、オーフス大学のResearch Support Officeとの出会いに始まる、大阪大学職員とURAによるデンマーク現地調査、オーフス大学URAによる大阪大学でのセミナーやトレーニングの実施など、我々大阪大学URAの先進事例活用の試みを紹介します。

P66 アカデミア創薬におけるプロジェクトマネジメント

○児玉 耕太、高山 大(北海道大学 創成研究機構)

大学のプロジェクトマネージャーとしての新たな業務への取り組みを紹介する。プレイングマネージャー的に実際にプロジェクトに共同研研究者として参画することにより、個別のプロジェクトのより詳細な理解を深め、プロジェクトの推進を図る意味でも非常に有効に機能しているケースを事実をふまえたフィクションとして報告する。

P67 北海道大学における URA 職創設への道

○加藤 真樹(北海道大学 URAステーション)

北海道大学では、URA職の創設に向けてワーキンググループを設置して検討を進めている。ワーキンググループは総務・人事関係および研究支援業務担当の事務系職員を中心に、URAや運営部局の管理職、総長補佐などで構成され、URAの実際の業務内容を元に事務的な手続きや規則に照らした形でURA職創設の検討を行った。これらの議論の過程を検証することで、大学に新たな「職」としてURAを創設する際に必要な情報や課題について考察する。

合同大会ポスターセッション:(14)URA育成・キャンパス

P68 URAのキャリアパスを考える

○五十畑 浩平、国土 祐未子、松木 則夫(香川大学 研究戦略室)

URAは研究者、職員と並び大学などの研究機関でその重要度を増しているが、事務系の業務と研究者としての職務が混在するなか、URAの長期にわたるキャリアパスを明確に描くことは難しい。また、URAのキャリアパスを検討する際も、URAの枠を超え研究職や事務職との多面的な関係性のなかで包括的に議論されることは少なく、あくまでURAの域を脱しない近視眼的な議論に陥りやすい。こうした事態を打開する一助として、香川大学研究戦略室では、URAを研究職キャリアの一環としてとらえ、その可能性を探るとともに、今後求められるURA像を模索する。